光源氏の物語における舜譚利用

―― 孝思想との関わりから ――

森　あかね

光源氏と弘徽殿女御の関係における物語は、中国・インド伝来の継息子譚の利用が見られる。本稿では、その継息子譚の一つである舜譚との展開比較を通し、孝思想との関わりから、物語の利用方法を考察する。

弘徽殿女御による圧力で、光源氏は都から自主的に退居するが、異常気象と病により弘徽殿女御・朱雀帝は苦しむことになる。光源氏帰京後、二人の病は回復し、光源氏は弘徽殿女御側を支援し、後に准太政天皇へ至る。この物語展開は、舜譚（継母の殺害計画を受け舜は家を出るが、後に旱と病に苦しむ一家と再会し、一家を支援し病も治し、後に舜は天子へ至る）の展開と重なり合う。

舜譚は孝子譚であり、その背景には孝思想がある。中国において孝は国家統一理念であり、孝子は王に近い人間であると説かれ、孝による治世を実現した人物は明王として尊ばれた。紫式部は孝思想を享受し、光源氏の王としての素質を表現し、光源氏の更なる栄華を期待させ、光源氏物語の道筋をつくりあげる。舜譚はその道筋を構成する素材の一つとして、物語に機能している。

一　はじめに

『源氏物語』に「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」[1]（「蛍」二一六頁）とあるように、現存するもの以外にも継子物語は多数存在していた。『住吉物語』・『落窪物語』・『宇津保物語』の例からも、継子譚が平安期物語において多大な影響力をもち、人々の関心ある素材であったことがわかる。

『源氏物語』には、物語の中心的人物から名前のみ登場の脇役まで、多種多様な継子関係が描かれる。その中で弘徽殿女御の関係における光源氏物語には、継子譚の利用が見られ、多くの先行研究が継子譚の側面から分析している[2]。宮中関係において「継子」「継母」の語が使用される例があり、また当時の人々の継子譚に対する認識を考えると、光源氏を男の継子、弘徽殿女御を継母とする見方が想定できる。この上で、拙稿において二

人の物語と中国・インド伝来の継息子譚の比較を行ったところ、実子安泰のための迫害発端、継子の追放・殺害計画、超自然的力・父親による救出、復讐行為を行わず継母に仕える結末、といった典型的特徴が二人の物語に見出せることから、光源氏と弘徽殿女御の物語素材として中国・インド伝来の継息子譚が使用されていることを論じた[3]。

中国伝来の継息子譚の代表として舜譚が挙げられる。舜は中国古代の伝説の王で、堯と並ぶ聖代の王と例にされる。日本において聖代と評されるのは延喜・天暦の時代であり、この時代を『源氏物語』が準拠とする説は『紫明抄』『河海抄』以来、引き継がれ論じられてきた。これに関連して『栄花物語』に気になる一文がある。

今の上の御心ばへあらまほしく、あるべきかぎりおはしましけり。醍醐の聖帝世にめでたくおはしましけるに、またこの帝、堯の子の堯ならむやうに、おほかたの御心ばへの雄々しう気高くかしこうおはしますものから、（巻一「月の宴」二〇頁[4]）

「今の上」は村上天皇を指すが、醍醐天皇の子である村上天皇を堯の子が堯であるようにと例える。堯の子である丹朱は能力的に劣り、跡継ぎとして相応しくなかったという伝承を受けての記述ではあろうが、いずれにしても醍醐天皇、村上天皇の二人に堯との重なりを見ている。聖代視された延喜・天暦と中国の聖代との結びつけは自然な連想であり、『栄花物語』独自の連想ではなかっただろう。そのように考えると、準拠として延喜・天暦の時代が設定された『源氏物語』にも、中国聖代を結びつける見方は可能であろう。そのように物語を見た際に、舜と光源氏の重なりが浮かび上がる。舜の継息子的立場、臣下から天子になる点など光源氏物語との類似点は多い。そこで本稿では、中国の継息子譚の代表である舜譚と比較を行い、物語における利用方法について考察していく。

二　舜譚の構成

青木正児氏は、舜の伝説は斉魯の地方に関係が深く、元々はその地の民間説話であっただろうとする[5]。この民間説話から発生したと想定される舜譚は様々な書物に所収されており、『孟子』「万章」、『史記』「五帝本紀」、『列女伝』「有虞二妃」など平安期に受容されていた漢籍にも引用されている。また、『注好選』、『宝物集』など日本編纂の説話集にも収められており、中国に留まらず、日本においても広く人々の間に伝わった話であると言える。舜譚は『孝子伝』にも所収されている。『孝子伝』は孝子説話を集めた中国幼学書であり、日本には陽明本と船橋

本が完本として残っている。[6]『孝子伝』は日本編纂の説話集の典拠利用にも使用され、『うつほ物語』にも取り込みが指摘されており、平安時代に教養書として受容されてきた書物である。この『孝子伝』の最初の説話として配されている話が舜譚である。

増田欣氏は、日本に見られる舜譚の構成には孝子伝型構成と史記型構成に分けることができるが、孝子伝型の構成が圧倒的に多く、更に陽明文庫本に近いものの方が多いと論じている。[7]この指摘を元にして本稿においては、陽明文庫本の『孝子伝』を比較する際の基本の形として使用し、他に見られる舜譚の記述も適宜参照していく。まず、陽明本『孝子伝』「帝舜」を全文挙げる。

帝舜は重花、至孝なり。其の父瞽瞍、頑愚にして聖賢を別かたず。後婦の言を用いて、舜を殺さんと欲す。便ち屋に上らしめ、下より之を焼く。乃ち飛び下り、供養すること故の如し。又井を治めしめて井を没め、又舜を殺さんと欲す。舜乃ち密かに知り、便ち傍穴を作る。父畢に大石を以って之を塡む。舜乃ち泣きて東家の井より出ず。因りて歴山に投じ、以って躬ら耕し穀を種う。天下大いに旱し、民収むる者無く、唯だ舜の種うる者のみ大いに豊かなり。其の父井を塡むるの後、両目清盲なり。市に至り舜に就き糴米するに、舜乃ち銭を以って還し米の中に置く。是くの如くすること一に非ず。父是れ重花たるかと疑う。人を借りて朽井を看せしむるに、子の見らるる无し。後に又糴米し、対して舜の前に在り。賈を論じて未だ畢らざるに、父曰わく、君は是れ何人にして、鄙に給せらる。将た我が子の重花に非ずやと。舜曰わく、是れなりと。即ち父の前に来たり、相抱き号泣す。舜衣を以って父の両眼を拭うに、即ち開明なり。所謂孝の至りと為す。堯之を聞き、妻わすに二女を以ってし、之に天子を授く。故に孝経に曰わく、父母に事えて孝ならば、天地明察し、乾霊を感動せしむるなりと。（『孝子伝』「帝舜」陽明本）[8]

舜は孝子であった。継母の提言により一家は舜の殺害を試みるが、舜はそれを回避し、一家はその報いを受けてしまう。舜は殺害未遂を受けてもなお、親に孝を示し、無償で尽くす。その孝により一家は救われ、更に舜は天子へと至る。話の主眼は舜の孝子の様を讃えることにある。舜譚の構成は次のようになる。

①舜は孝子であった
②継母が舜の殺害を計画、父が賛同
③殺害計画の実行
④舜は自発的に家を脱出
⑤舜は歴山へ至り、天下は旱りの中、舜は豊かに過ごす
⑥父は盲目になる（『注好選』継母の瘖瘂が付け加えられてい

る）

⑦一家を舜は無償で支援（船橋本・『注好選』は継母）

⑧父と舜が再会

⑨舜が父の目を拭い、父の目が回復（『注好選』は継母の瘖瘂も治る）

⑩舜は天子へと至る

三　舜譚と光源氏物語の比較

前節で挙げた舜譚の展開を追うと、『源氏物語』における光源氏と弘徽殿女御の物語との類似に気づく。展開に沿いながら類似点を挙げ、二つの比較を行っていく。

A光源氏の際立つ父への思い

桐壺院には大勢の子どもがいたが、その中で光源氏の父への思いは際立っていた。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれてものも思しわかれず。後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。（「賢木」九八頁）

桐壺院崩御後の法事に誰よりも力を注いだのは光源氏である。ここで語られる光源氏の「孝じ仕うまつりたまふさま」とは、子として父親の追善供養を行うことである。儒教思想から生まれた孝は仏教思想と融合する。仏教伝来への強い反発のあった中国における仏教側の対策によって、孝の理念を取りこんだ書物・教典が生み出され、盛んに死後の読経が行われるようになった。[9]その結果、親の追善供養は孝行為として浸透していくこととなる。光源氏の父親への追善供養は、時勢変化への不安によるものも大きいだろうが、藤の喪服で身をやつし、心苦しげな様子は、『孝経』「喪親章　第二十二」における「孝子の親に喪するや、哭して依せず、礼は容つくる亡く、言は交らず、美を服して安からず」[10]という、喪に服する孝子の姿と通じる。

B弘徽殿女御による追い落とし計画、朱雀帝が従う

桐壺院の崩御により、時勢は大きく変化する。右大臣家の勢いは増し、光源氏への圧力がかけられるようになった。

院のおはしまつる世こそ憚りたまひつれ、后の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむと思すべかめり。事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。（「賢木」一〇一頁）

この圧力は、継母的立場である弘徽殿女御が筆頭となり行われ

た。舜譚における継母が継子の殺害を発案し、夫をやりこめ従わせる点との類似が見出せる。舜譚の場合、計画に従うのは舜の父であるが、『源氏物語』において父である桐壺院は光源氏を庇護する存在であった上に、亡くなってしまった。追い落とし計画に従わされる役割は、兄である朱雀帝に課せられる。朱雀帝は桐壺院から、光源氏に関する遺言を残されていたにも関わらず、弘徽殿女御の意向に抵抗することができず、従ってしまうのである。父が兄になっている点は『源氏物語』が、宮中を舞台として設定されたための改変であっただろう。中国の継子いじめ譚の迫害要因として実子の家督・財産・帝位相続が設定されることが多い。陽明本・船橋本『孝子伝』における舜譚では迫害要因は明記されないものの、『纂図附音本　注千字文』や『三教指帰集注』に引用された舜譚の記述では継母の実子が登場し、実子優位の思いが設定されることから、三木雅博氏は実子を要因とする迫害設定が本来的な舜譚のあり方だったと想定している。[11]『源氏物語』の場合も、弘徽殿女御の光源氏憎悪の根底にあるのは右大臣一家・朱雀帝の安泰である。在位時、または退位後も実権を握っていた桐壺院の及ぼす力は大きい。弘徽殿女御側からすれば、かつては皇太子立坊の懸念要因であって、政敵左大臣家の婿である光源氏に対する桐壺院の寵愛は、右大臣一家・朱雀帝の地位への脅かしであった。しかし、ここで舜譚同様に父親桐壺院を従わせる展開を設定すれば、後の物語は続かない。絶大な力を持つ桐壺院従わせることが可能ならば、右大臣家の安泰は約束され、弘徽殿女御の目的は達成されるため、迫害を加える必要がなくなってしまうのである。舞台に即した物語を展開させるため、桐壺院は光源氏を庇護する存在であり続け、弘徽殿女御の憎悪理由を継続させ、桐壺院の死により迫害を開始するという状況を設定している。その際に、父を受け継ぐ者として兄朱雀帝が役割を担うのである。

C光源氏の除名処分、流罪の評定

舜譚では、継母は舜の殺害を願い、小屋の屋根に登らせ火をつける、生き埋めにするといった計画が実行される。『源氏物語』は穢れを厭う宮中が舞台であり、血生臭いことは語られないが、弘徽殿女御側は社会的に光源氏を抹消するための策略を練り計画を進めるため、継母による継子の存在の抹消行為として見ることができるだろう。

> さしてかく官爵をとられず、あさはかなることにかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、うつしざまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに外国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定めなどもはべなるは、（「須磨」一六五頁）

光源氏は官位を失い、更には流罪の評定も進み、追い詰められ

ている。仮に流罪に処されてしまえば、死罪の実施はなかったため、事実上最も重い罪に処されてしまうことになる。一度、流罪に処された者が再び、都に戻り栄えることはほぼ不可能である。弘徽殿女御は光源氏を追い出し、徹底的に勢力を潰しにかかっていた。中国・インドの継子譚はこのような継子の追放・殺害が盛り込まれ、特徴的である。(12)

D光源氏の自主的退居

舜譚では、舜は一家の殺害計画を退け、家を脱出する。この脱出は、一家に知らせることはなく密かに行ったため、一家は舜が死んだと思っていた。

三月二十日あまりのほどになむ都離れたまひける。人に、いまとしも知らせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり七八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。(「須磨」一六三頁)

光源氏の場合も、流罪が言い渡される前に、秘密裏に都を脱出する。他人には日を告げず、極々少数にのみ知らせただけである。

E光源氏は須磨、後に明石へ　異常気象　明石での裕福な暮らし

舜は脱出後、歴山に至り、農作を行う。この後、天下を旱が襲い人々は困窮し、舜の一家もまた旱に苦しめられていた。これに対し舜の周りのみは豊かに過ごすことができている。

「京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政も絶えてなむはべる」など、(「明石」二二四頁)

『源氏物語』では、光源氏が須磨退居をしてしばらく経つと、異常気象が襲う。それは京も同様で政治は滞り、世の終わりを思わせるほどであった。最初は光源氏も異常気象に苦しむ点は舜譚とは異なる。これは自身も「須磨」での藤壺対面の際に密通の罪を自覚していたように、罪の咎めを一度受ける必要があったためであるだろう。光源氏物語を構成しているのは継息子譚だけではない。藤壺との物語を組み込むための展開を作り上げたのであろう。光源氏は桐壺院の霊、住吉神の導きにより救出され、光源氏への咎めは終了する。その後に明石入道と出会い、明石へ移る。

入道の領じめたる所どころ、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさかすべき渚の苫屋、行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行ひ、この世の設けに、秋の田の実を刈り収め残りの齢積むべき稲の倉町どもなど、をりをり所につけたる見どころありてし集めたり。(「明石」二三三頁)

明石入道は四季折々の情趣を生かした造りの土地で、米倉町を

営み万事に備えており豪勢な生活を送っている。そこに光源氏は迎え入れられた。後に明石の君との結婚も進められ、光源氏は一変して豊かな生活を送っている。しかし、以前として宮中では不穏なことが続いている。不穏な宮中で過ごす弘徽殿女御勢力と、対照的な光源氏の豊かな暮らし。舜譚における旱で苦しむ継母一家と、対照的な舜の歴山での豊かな暮らし。両者は極めて類似している。

F朱雀帝の眼病、弘徽殿女御も病を患う

旱に苦しむだけではなく、舜の父親は舜を井に塡めた後に、盲目になってしまう。これは舜の殺害未遂の報いを受けたものと理解できる。

　睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。（中略）大宮もそこはかとなううづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏に思し嘆くことさまざまなり。（「明石」二五二頁）

『源氏物語』の場合も、朱雀帝の元に桐壺院の霊が現れた後、朱雀帝は眼病に苦しむ。『花鳥余情』は朱雀帝の眼病素材として、「朱雀院の御目わつらひ給ふ事は三条天皇即位の後御耳目あきらかならさることを思よせたりそれは民部卿元方の霊によれり又寛算供奉か霊ともいへり」[13]と、三条天皇の眼病を指摘している。桐壺院は朱雀帝に光源氏の処遇への恨みを訴え、偽りの罪によって追い落としたことの報いとして眼病が表れる。この朱雀帝が眼病に苦しむ姿は、舜譚における罪なき舜への殺害計画を実行したことへの報いとして、盲目となった父親の姿とも重ね合わせられる。起こした行動の報いが、目に表れ苦しめる点が舜譚と重なり合う。

また、『注好選』の舜譚の場合は、父の盲目に加えて継母も瘖瘂となっている。『源氏物語』の弘徽殿女御が病に苦しみ、朱雀帝とともに弱っていく様と共通していると言えるだろう。

G光源氏帰京後、朱雀帝と再会

旱に苦しむ一家に気づいた舜は、密かに支援を行っていた。その後、父は無償で米を与える人物が舜であることに気づき、父と舜は再会を喜ぶ。再会は父からの働きかけによるものだった。

　上も、恥づかしうさへ思しめされて、御よそひなどことにひきつくろひて出でおはします。御心地例ならで日ごろ経させたまひければ、いたうおとろへさせたまへるを、昨日今日ぞすこしよろしう思されける。御物語しめやかにありて夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう静かなるに、昔のことかきくづし思し出でられてしほたれさせたまふ、もの心細く思さるるなるべし。（「明石」二七三頁）

『源氏物語』でも朱雀帝は光源氏を京に呼び寄せ、再会に涙を流し喜び合う。光源氏の呼び寄せを決断し、再会を実現させたの

は朱雀帝であるため、自分から働きかけを行った舜譚の父親との重なりを見ることができる。ただし帝という立場である朱雀帝は自ら光源氏に会いに行くことはできないため、光源氏が朱雀帝の元に参上するという形になっている。

H再会後、朱雀帝の眼病回復

舜譚では父と再会後、舜が目を拭うことにより、父の盲目が治るといった奇跡が描かれる。父にもたらされた報いは、舜により許される。迫害を受けてもなお、一家を支援する舜の孝子の様が天の感動をもたらし、奇跡を引き起こしたのである。

帝は、院の御遺言を思ひきこえたまふ、ものの報いありぬべく思しけるを、なほし立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。時々おこりなやませたまひし御目もさわやぎたまひぬれど、（「澪標」二七九頁）

光源氏は桐壺院の法華八講を執り行う。この後、朱雀帝は光源氏を元の地位に戻すと、患っていた眼病が回復する。弘徽殿女御の病気は「御なやみ重くおはしますうちにも」（「澪標」二七九頁）とあり、この時点では回復していないが、弘徽殿女御は「少女」まで長生きしているため、この後に回復へ向かっていったと思われる。光源氏の桐壺帝への法華八講は、父の成仏を願う追善供養、すなわち孝行為であった。この後に朱雀帝が「ものの報い」の意識、眼病の回復が語られる。報いによる罰を受け、その許しの契機として継子の孝行為が設定される流れは共通していると言える。

I弘徽殿女御への支援

光源氏は帰京後、力を失った弘徽殿女御への支援を行っている。これは、右大臣を急に亡くし、揺らぐ右大臣家全体への支援にも繋がったことであろう。

大后は、うきものは世なりけりと思し嘆く。大臣は事にふれて、いと恥づかしげに仕まつり心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを、人もやすからず聞こえけり。（「澪標」三〇一頁）

ここでの「心寄せ」とは、対象の人物に対する賛同や期待を示し、援助する意味である。光源氏は弘徽殿女御に寄り添い、援助を行う関係にあり、弘徽殿女御へ物質的支援を行い、味方をしていたと考えられる。光源氏は須磨退居の際に、冷淡な対応をとった人物にも寛容な様は見せているが、兵部卿宮や小君に対する対応から[14]全てを許しているわけではなく、以前との差はつけていることがわかる。その中で、須磨退居に追い込んだ弘徽殿女御に対して、丁重に仕え支援を行う姿は異例の対応である。これは、舜譚において自分の殺害を計画した一家へ、無償の支援を行った姿と類似している。『源氏物語』におけるG、H、Iの展開は舜譚との対応を見ると、順番が入れ替わっている。こ

れもこれまでの変更同様の理由が想定できる。帝より先に、弘徽殿女御への仕えを先に提示してしまえば、大后・右大臣一家を帝よりも優先させたことになる。光源氏の最優先事項は、朱雀帝との関係である。この問題を解決した後に、弘徽殿女御との関係が語られている。宮中へと舞台を移した際の変更がここでも行われているのである。

J光源氏が准太政天皇の位を得る

舜は孝子の様が認められ、堯により天子の位を譲られる。『史記』によると舜は先祖を辿ると帝顓頊に行きつくが、「窮蟬自従り以て帝舜に至るまで、皆微にして庶人たり。（『史記』「五帝本紀」[15]）」と、帝顓頊の子窮蟬から舜に至るまでは皆身分が低く、庶人であったとする。つまり、舜は皇位につく身分ではなかったが、孝によって臣下から天子に至ったのである。

その秋、太政天皇になぞらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ。（「藤裏葉」四五四頁）

光源氏の治世者としての相・宿運は「桐壺」の高麗の相人の言葉から始まり、物語で繰り返し語られる。しかし、光源氏は臣下の身分とされ、一度は官位も失っている。帝位から遠ざけられたはずの光源氏であったが、「藤裏葉」で准太政天皇の位を手に入れる。太政天皇に準ずる位という、限りなく帝位に近い、臣下の身分からは例のない位であった。冷泉帝の苦悩もあり、もたらされた位であったが、臣下が最終的に准太政天皇に至るといった結末は舜譚と重ね合わせられる。

舜譚と弘徽殿女御の関係を中心とした光源氏物語との対応を改めて示すと以下の通りになる。

舜譚	『源氏物語』
①舜は孝子であった	A光源氏の際立つ父への思い
②継母が舜の殺害計画	B弘徽殿女御による追い落とし計画
父が賛同	朱雀帝が従う
③殺害計画の実行	C光源氏の除名処分・流罪評定
④舜は自発的に家を脱出	D光源氏の自主的退居
⑤舜は歴山へ至り、	E光源氏は須磨、後に明石へ
天下は旱りの中、	異常気象
舜は豊かに過ごす	明石で裕福な暮らし
⑥父は盲目になる	F朱雀帝の眼病
（『注好選』継母の瘖瘂）	弘徽殿女御も病を患う
⑦一家を舜は無償で支援	I弘徽殿女御への支援
⑧父と舜が再会	G光源氏帰京後、朱雀帝と再会
⑨舜が父の目を拭い、	H再会後、朱雀帝の眼病回復
父の目が治る	
⑩舜は天子へと至る	J光源氏が准太政天皇の位を得る

このように舜譚と、弘徽殿女御との関係を中心とした光源氏

の物語展開は非常に類似している。舜譚以外の継子譚や、継子譚以外の素材も組み合わされて成り立っている物語だが、その中でも舜譚は、展開の骨組みとして大きな割合を占めていると考えられる。宮中舞台の物語に当てはめ、他の人物の物語との整合性を持たせるために、人物の役割や順序等に手を加えながら、物語に組み込んでいる。元の素材に手を加えることで、他の素材と自然な形で噛み合わせ、互いを整えながら、一つの『源氏物語』という箱の中に収めているのである。

四　国家統治理念としての孝

前節で舜譚と『源氏物語』の展開の対応を見たが、舜譚が孝子譚であることに注目し、話を支える孝思想について確認したい。舜譚を収録する『孝子伝』は数多く作成され、現存本とは異なる系統の『孝子伝』も存在していたことが、逸文を通して確認できる。舜譚の広がりについては前述したが、『孝子伝』に収録されている他の孝子説話も多数の類話・同話が見受けられる。この背景に孝思想を奨励し、説話を通して世間に広めようとする動きが想定される。

夫れ孝は徳の本なり。教の由つて生ずる所なり。（『孝経』「開宗明義章　第一」）

『孝経』では、孝をあらゆる道徳の根本であるとし、儒教思想の基本理念と説いている。基本理念であるために、どの立場の人間にも当てはめられるものであり、天子から人民に至るまで、その立場に即した孝のありかたが述べられていく。『礼記』においても、

夫れ孝は之を置きて天地に塞がり、之を溥めて四海に横はり、諸を後世に施して朝夕無し、推して諸を東海に放りて準ひ、推して諸を西海に放りて準ひ、推して諸を南海に放りて準ひ、推して諸を北海に放りて準ふ。詩に云ふ、西より東より、南より北より、思ひて服せざるは無しと。此の謂なり。（『礼記』「祭義　第二十四」[16]）

と、孝は一度使用されると世間に広く行きわたり、様々な状況、場に通じる正道であることを説く。孝は儒教思想の根幹として尊重され、それは世間を伝播していくものであった。このように基本理念として重要視されている孝であったが、特に実践が求められたのは天子であった。

子曰く、親を愛する者は、敢て人を悪まず。親を敬する者は、敢て人を慢らず。愛敬親に事ふるに尽して、然る後徳教百姓に加はり、四海に刑る。蓋し天子の孝なり。（『孝経』「天子章　第二」）

『孝経』は、愛と敬の心で親に仕え、それが後に天下万民に広く

行き渡るようになることを天子の孝とする。天子は天下万民の模範的存在であり、率先して孝を実践すべきであると説くのである。『礼記』においても、

至孝は王たるに近く、至弟は覇たるに近し。至孝は王たるに近しとは、天子と雖も必ず父有ればなり。至弟は覇たるに近しとは、諸侯と雖も必ず兄有ればなり。先王の教、因りて改めず、天下国家を領する所以なり。（『礼記』「祭義第二十四」）

孝子であればあるほど天下の王に近い存在であるとし、国家安泰の道に孝は繋げられている。つまり、孝は国家統治理念として捉えられていたのである。古代の明王は孝の実践による統治者として讃えられている。

故に生けるには則ち親之に安んじ、祭には則ち鬼之を享く。是を以て天下和平にして、災害生せず、過乱作らず。故に明王の孝を以て天下を治むるや此の如し。（『孝経』「孝治章第九」）

孝による統治が天下太平を作り上げたとされ、孝は治世と結びつけられるものであった。孝を尽くすことで人民の心を掴み、人民間の和平がもたらされ、先祖霊の尊重により、災害の起きない世がもたらされたと、明王たる所以を孝に見るのである。

舜は堯と並び称され、中国の聖代の王として引き合いに出される、まさに明王の代表である。舜譚が各書に引用されるのも、その理想性によるものが大きいのだろう。臣下であった舜が天子の位を手に入れたのも、その孝子の様を堯が讃えたことによる。孝子説話の広がりの背景には、国を治める人物に必要な素質としての孝を奨励する意図があった。

光源氏も孝行為に励む様が描かれる。桐壺院の亡き後、光源氏は追善供養に積極的であった。崩御後の法事を行う様は、子の誰よりも際立っていたことが語られ、「澪標」では桐壺院のために大規模な法華八講を行っている。

さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御事を心にかけきこえたまひて、いかでかの沈みたまふらん罪救ひたてまつることをせむと思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびき仕うまつること昔のやうなり。（「澪標」二七九頁）

これは世間の関心を集め、多くの人が仕えたと語られ、公的なものとして他へ発信されている点が注目される。この法華八講における光源氏の権力誇示の読み取りも重要であるが、同時に桐壺院への孝を世間へと知らしめていることも読みとる必要があるだろう。

孝が知らしめられるというのは、弘徽殿女御への対応にも見られる。

大后は、うきものは世なりけりと思し嘆く。大臣は事にふれて、いと恥づかしげに仕まつり心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを、人もやすからず聞こえけり。（「澪標」三〇一頁）

光源氏の対応を見て、人々はそれに対する疑問を呈している。この態度には報復の意味合いも読み取られているが、[17]『落窪物語』や『住吉物語』等のような、継子側が継母に実害をもたらすといった報復行為ではない。『源氏物語』において「心寄せ」を行う主体の根底にある感情は、対象に対する好意である。[18]その場限りの浅い感情ではなく、対象へ強く気持ちが傾き、主体の心が寄り添っている。「澪標」における光源氏の「心寄せきこえたまふ」様は、対象の人物への賛同や期待を示し、援助する例の「心寄せ」としての理解が適当で、光源氏は弘徽殿女御に寄り添い、援助を行う関係にあり、弘徽殿女御へ物質的支援を行い、味方をしていたことを示している。報復・勝利者の施しとしての要素を読み取る以上に、光源氏が弘徽殿女御へ寄り添い、親愛を示す様を読みとる方がよいように思われる。継母的立場である弘徽殿女御の支援という点で考えると、光源氏の孝子の様としての理解もできるだろう。孝子であるからこそ、世間一般の理解を越えているのである。孝子の理想性と、その理想を貶めていた敵役が対比され、世間一般の人々は弘徽殿女御を憐れむことになる。

桐壺院、弘徽殿女御の両者への光源氏の孝は、他者の反応が添えられ提示される。これは冷泉帝の後見人であり、実質的に政界の主導権を握っている光源氏の孝行為が公へと広げられていることを示しており、『孝経』等で説かれる孝の在り方と一致している。国の上に立つ者として率先して孝を示す姿は、天子の孝であり、天下安泰への導く王としてあるべき姿と重なり合う。

前節で見た光源氏物語と舜譚の重なりと合わせて、光源氏の孝行為と天子の孝の重なりを見ると、他へ知らしめられる光源氏の孝行為を、国家統治理念としての孝の知識を踏まえた、光源氏の王としての資質を示す描写として理解ができるのではないか。光源氏の治世者としての相・宿運は物語において再三語られている。「澪標」において明石姫君が誕生した際に「宿世遠かりけり」（「澪標」二八六頁）と、自身の帝位への無縁さを確認しているのにも関わらず、その後に物語で光源氏の王としての資質が提示されることには、光源氏の更なる栄華の示唆を思わせる。

日本においても『孝経』は重要視されており、孝における国家統治の理想性は受容された。律令によって、『孝経』は学者の基本書として定められている。

孝経、論語ハ、学者兼テ習ヘ之。（中略）孝経、論語ハ皆須シ二兼テ通ス一。（『令義解』巻三「学令」[19]）

また孝謙天皇の天平宝字元年の詔では、

治メレ民ヲ安スルハレ国ヲ必ス以テ孝ヲ理サム。百行ノ之本莫シレ先ナルハ二於茲ヨリ一。宜ク下令シテ二天下ヲ一、家コトニ蔵メテ二孝経一本ヲ一、精勤誦習シ、倍マス〳〵加フ中教授ヲ上。百姓ノ間ニ有ラハ二孝行通シテレ人ニ、郷閭欽仰スル者一。宜クレ令二所由ノ長官ヲシテ、具ニ以テ名ヲ薦メ一。（『続日本紀』[20]）

と民間にも孝経の学習を求め、孝の実施を推奨している。また天皇にとって、孝が思考を支える重要思想となっていたことは、読書始の儀の教科書の定番が『孝経』だったことから推測される[21]。田中徳定氏は、

『孝経』は、平安時代における天皇の倫理観の基盤になっていたのではないかと考えられ、『孝経』に説かれる孝思想は、天皇の行動や思考の規範となっていたと考えられるのである。このことは、当然、物語に描かれる天皇の行為や思考のありかたにも反映していたはずである[22]。

と、平安時代の天皇の思考基盤に孝があり、『源氏物語』における帝の描写に孝思想の投影を指摘する。また、紫式部の父、藤原為時は、貞元二年の師貞親王の読書始の儀で尚復文章生を務めている。ここで使用されている教科書は『御注孝経』である[23]。『孝経』に造詣が深い父の元で、紫式部が『孝経』や孝の理念を吸収したことは想像に難くない。『紫式部日記』の敦成親王の御湯殿の儀式の記述において、夜の儀式を実際に目にはしていないにも関わらず「例の孝経なるべし。」（『紫式部日記』一三九頁[24]）と推測していることも、『孝経』の性質と使用場を十分に理解しているが故の記述であると言える。紫式部は孝思想を理解し、明王の素質表現として、『源氏物語』へと組み込んだのである。紫式部の孝思想への理解、舜譚の素材利用により、光源氏の准太政天皇へ至る物語の道筋が作り上げられる。光源氏の准太政天皇への過程には、藤壺との密通、冷泉帝の苦悩など、他の多数の素材が複雑に絡み合っているが、道筋を支える素材の一つとして、舜譚も物語に組み込まれているのである。

『源氏物語』と儒教を関連付ける研究は非常に少ない。その理由として津田左右吉氏の、平安時代に儒教は生活に反映しておらず、思想は文学上にも現れないという指摘が現代もなお影響を与えているからである。

儒学は素より宗教ではなく、従つて仏教のやうに強く人心を動かすことはできないが、ともかくも仕官の方便として書物は学ばれた。けれどもそれは仏教の学問と同様に文学上の知識に過ぎないものであつて、この知識は漢文をつゞり漢詩を作ることによって権家の権を振ふ具となり、権家

を中心としてゐる文化の装飾に用ゐられたのみである。実際の政治及び道徳の上には何等の交渉がない。[25]

寺内清之介氏の『源氏物語』本文内の儒教的表現を具体的に挙げ影響を論じたもの[26]、光源氏の人物造型や物語展開に儒教思想の反映を指摘[27]するものなどのように、儒教思想からの分析の試みは少ないながらも行われてはいるが、西村富美子氏のように

『源氏物語』は男女の情、恋をテーマとする物語であり、儒教は国家の支配のための人材養成を究極の目的とする思想であり、両者は根本的に全く相反する性質のものである。物語のなかには仏教思想の影響は濃厚であり随所に見られるが、それに対して儒教思想の影響は明確には指摘することが困難である。かつて津田左右吉氏が説かれた論は、今に至るも基本的には否定することはできない。[28]

と、『源氏物語』は儒教全般と相反する性質のものと捉える立場もある。

しかし、文学知識においての儒教思想があったのは津田氏も既に認めている通りである。『孝経』は律令、詔によって学習が勧められた必読書であり、親王の御湯殿の儀、読書始に使用されたテキストであり、文学知識としての意義は大きい。舜譚などの日本で受容された孝子説話の存在もそれを示している。実行の有無は別にしても、説話と同時に背景の儒教思想も人々に広まっており、作り手、読み手ともに共有する知識であった可能性は極めて高い。儒教と平安文学を結び付ける試みは必要であり、新たな解釈を導きだす道として、改めて見直す必要があるだろう。

五　まとめ

孝により臣下が帝位を獲得する舜譚は、弘徽殿女御との関係を中心とした光源氏の物語における展開の骨組みとして、大きな割合を占める素材となっている。この光源氏と舜の重なりによって、光源氏の孝子としての姿が浮かび上がってくる。中国において孝は国家統一理念であり、孝子は天子に近い人間であると説かれ、孝による治世を実現した人物は明王として尊ばれた。日本においても、『孝経』の学習、孝の実施が奨励され、少なくとも文学知識としての孝思想は受容された。紫式部はこの孝思想を享受し、光源氏の物語に組み込み、光源氏の王としての資質を示したのである。それは政権復帰した光源氏の今後の栄華を期待させ、光源氏物語の道筋を作り上げる。舜譚は、その道筋を構成する素材のうちの一つではあろうが、確かに『源氏物語』という大きな物語を動かす素材として機能している。

注

（1）『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集　源氏物語①～⑥』（小学館　一九九四年～一九九八年）による。

（2）石川徹「継子ものとその周辺―落窪物語をめぐって―」（『平安時代物語文学論』笠間書院　一九七九年）、日向一雅「『源氏物語』と継子譚」（『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社　一九八三年）、池田和臣「『源氏物語』における継子譚の形態分析―玉鬘物語の解析のために―」（『源氏物語表現構造と水脈』武蔵野書院　二〇〇一年）ほか。

（3）拙稿「継息子の物語としての光源氏物語―弘徽殿女御との関係を中心に―」（『国語国文　八三―三号』二〇一四年三月）。光源氏と弘徽殿女御の呼称として「継子」「継母」が使用されることはないが、「桐壺」で桐壺帝は弘徽殿女御の御簾の中に光源氏を入れ、親しむように依頼している。一般家庭の継子関係とは同列にできないが、この二人を、継母的要素をもつ人物、継子的要素をもつ人物として扱い、以下論じていく。

（4）山中裕、秋山虔、池田尚隆、福長進校注・訳『新編日本古典文学全集　栄花物語①』（小学館　一九九五年）

（5）青木正児「堯舜伝説の構成」（『支那文学芸術考』弘文堂　一九四二年）後に『青木正児全集2』（春秋社　一九七〇年）に所収。

（6）『孝子伝』については黒田彰『孝子伝の研究』（思文閣　二〇〇一年）に詳しい。

（7）増田欣「虞舜至孝説話の伝承―太平記を中心に―」（『中世文芸　二二号』一九六一年八月）後に『『太平記』の比較文学的研究』（角川書店　一九七六年）に所収。

（8）幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院　二〇〇三年）以下、漢文引用は書き下し文により、旧漢字・異体字は新字体に改める。

（9）仏教の儒教取り込みの歴史については道端良秀『仏教と儒教』（第三文明社　一九七六年）に詳しい。

（10）『孝経』の本文引用は栗原圭介著『新釈漢文大系　孝経』（明治書院　一九八六年）による。底本は古文孝経孔氏伝旧鈔本である。清和天皇により『孝経』の学習は御注孝経の使用が定められ、平安時代の公式な場での使用は御注孝経であるが、重野安繹校訂『漢文大系　御注孝経』（冨山房　一九一〇年）を確認したところ、本文に関して両者の大きな異同は見られなかった。

（11）三木雅博「説経「しんとく丸」「あいごの若」の成立と中国伝来の〈継子いじめ譚〉―クナラ太子譚と舜譚・伯奇譚の接合による物語形成の可能性について―」（説話と説話文学の会編『説話論集第一三集　中国と日本の説話Ⅰ』清文堂出版　二〇〇三年）

（12）注3拙稿に同じ。

（13）伊井春樹編『源氏物語古注集成　松永本　花鳥余情』（桜楓社　一九七八年）

（14）光源氏の弘徽殿女御への態度への描写と並べて、光源氏の兵部卿宮への冷淡な態度が描かれている。

兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを大臣はうきものに思しおきて、昔のやうにも睦びきこえたまはず。なべ

ての世にはあまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情なきふしもうちまぜたまふを、（「澪標」三〇一頁）

また、空蟬の弟・小君は、かつて光源氏と空蟬の間を取り持つ役割を担い、光源氏も世話をやいていたが、須磨退居の際に疎遠になってしまう。

昔、童にていと睦ましうらうたきものにしたまひしかば、かうぶりなど得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、ものの聞こえに憚りて常陸に下りしをぞ、すこし心おきて年ごろは思しけれど、色にも出だしたまはず、昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人の中には数へたまひけり。（「関屋」三六一頁）

光源氏は帰京後、小君を親しい家人の中に数えてはいるものの、須磨退居時にも随った家人とは明確な区別をつけ、昔ほどの心遣いではない。

（15）吉田賢抗著『新釈漢文大系　史記一』（明治書院　一九七三年）

（16）『礼記』の本文引用は竹内照夫著『新釈漢文大系　礼記　上～下』（明治書院　一九七一～一九七九年）

（17）「ここでの源氏は一面では、権勢家としての風貌をも呈しはじめる。弘徽殿への「心寄せ」は、かつての非道に対する、今は優位に立つ者の報復であり、」（新編全集「澪標」三〇二頁頭注）

（18）『源氏物語』には「心寄せ（名詞）」は三四例、「心寄す（動詞）」は三四例（うち一例は「澪標」の例）、「心を寄す」八例、「心寄せあり顔なり」一例、「心寄せわたる」一例が使用されている。これらの用例を検討すると、以下のように大きく分類できる。

①人間関係において愛情、親愛の感情を示す例

心寄せ・・・「賢木」一四八頁、「薄雲」四四六頁、「若菜上」二二・一二九頁、「若菜下」一六〇・一九四頁、「匂兵部卿」一七・二一・二五頁、「椎本」二〇九頁、「総角」三三一頁、「浮舟」一七八頁　心寄す・・・「桐壺」四四頁、「胡蝶」一七四頁、「藤袴」三二九頁、「若菜上」二九頁、「若菜下」一五七頁、「竹河」七三・七五頁「総角」三一三頁、「早蕨」三六三頁、「浮舟」一八一頁、「蜻蛉」二五六・二六四頁　心を寄す・・・「明石」二七五頁、「若菜上」二二頁　心寄せあり顔・・・「竹河」九二頁

②人間以外のものに対する愛着を示す例

心寄せ・・・「薄雲」四六二頁、「早蕨」三四八頁、「手習」三五六頁　心寄す・・・「野分」二六三頁（二例）、「幻」五三一頁　心を寄す・・・「薄雲」四六四頁、「藤裏葉」四三七頁、「手習」二八四頁

③対象の人物への賛同や期待を示し、援助する例

心寄せ・・・「賢木」九一・一四八頁、「澪標」三〇〇頁、「藤袴」三三八頁、「藤裏葉」四四七・四五三頁、「若菜上」二九、四八頁、「若菜下」一七七頁（二例）、「横笛」三六二頁、「総角」二四八・二七六頁、「早蕨」三五三・三六九頁、「寄木」四七五頁、「浮舟」一三九頁、「蜻蛉」二七三頁、「手習」三三八頁　心寄す・・・「須磨」一八八頁、「絵合」三八五頁、「朝顔」四八五頁、「少女」三二頁、「若菜上」六七頁、「若菜下」一六九、二一〇頁、「竹河」一〇四頁、「橋姫」一二四・一三五頁、「椎

本」一七〇・一七八頁、「早蕨」三五一頁、「浮舟」一〇七頁、「蜻蛉」二二七・二七三頁　心を寄す・・・「朝顔」四八八頁、「竹河」一〇五頁、「総角」二六〇頁　心寄せわたる・・・「藤裏葉」四四〇頁

④人間以外のものが対象に賛同、期待を示し、援助する例

心寄す・・・「竹河」八〇頁、「総角」二九五頁

(19) 黒川勝美編『新訂増補国史大系　令義解』(吉川弘文館　二〇〇〇年)

(20) 黒川勝美編『新訂増補国史大系　続日本紀』(吉川弘文館　二〇〇〇年)

(21) 親王の読書始については、尾形裕泰「就学始の史的研究」(『日本学士院紀要　第八巻第一号』一九五〇年三月)による詳しい調査がある。

(22) 田中徳定「光源氏召還と「太上天皇になずらふ御位」―『源氏物語』における天皇の孝心―」(河添房江ほか編『家と血のイリュージョン』勉誠出版　二〇〇一年)

(23) 『日本紀略』「廿八日己丑、東宮初読書。于レ時太子御二坐閑院東対一、学士権左中弁菅原朝臣輔正、尚復文章生藤原為時(貞元二年三月)」(黒川勝美編『新訂増補国史大系　日本紀略後編』吉川弘文館　二〇〇〇年)、『兵範記』「御書始例(裏書)(中略)華山院貞元二年四月廿八日戊申、於閑院東対読御注孝経、十歳、学士従四位下権左中弁菅原輔正、尚復本宮非蔵人文章生藤原為時(久壽二年一二月)」(「増補史料大成」刊行会『史料大成　兵範記二』臨川書店　一九六五年)

(24) 藤岡忠美校注・訳『新編日本古典文学全集　紫式部日記』(小学館　一九九四年)

(25) 津田左右吉『文学に現はれたる国民思想の研究　改訂版』(岩波書店　一九五一年)尚、引用の際に、旧漢字・異体字は新字体に改めた。

(26) 寺内清之介「源氏物語と儒教」(『平安文学研究　三九号』一九六七年一二月)

(27) 清水好子『源氏物語論』(塙書房　一九六六年)、田中隆昭「光源氏における孝と不孝―『史記』とのかかわりから―」(後藤祥子ほか編『東アジアの中の平安文学』勉誠社　一九九五年)、日向一雅「光源氏の儒教的形象―『九条右丞相遺誡』と『令集解』を媒介にして―」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂　一九九九年)

(28) 西村富美子「源氏物語の儒教」(増田繁夫ほか編『源氏物語研究集成第六巻　源氏物語の思想』風間書房　二〇〇一年)